

新型インフルエンザワクチンの容器が大きすぎて使い勝手が悪いことから、各自自治体や医療機関が、余ってしまったワクチンの扱いに苦慮している。福井市の福井県立病院では九日、余ったワクチン約二十人分を廃棄していたことが判明。「もったいない」と批判する声もあるが、県や病院側は「予約のキャンセルが相次ぎ、仕方がなかった」と窮状を訴えた。

新型インフルワクチン

厚生労働省はワクチン配布に際して、流通を効率化し一気に接種できるように、従来の一ミリ瓶に加え、昨季までなかった十ミリ瓶を製造して配布した。

しかし、これは成人で約二十人分、小児は最多で約五十人分にあたる量。ワクチンは開封後、二十四時間以内に使い切らなければならぬため、一度に多くの接種者を集めなくてはならず、医療関係者から「使いにくい」と強い批判が出ていた。

福井県立病院によると一歳～小学三年生の接種が始まった今月七日、予約した八十八人のうち二十二人が「新型インフルエンザにかかったため、免疫がで

容器大きく使い切れず

きた」などとキャンセル。同病院では、十ミリ瓶の二瓶目の半ばで六十六人に接種したところで、残った分を廃棄したという。

病院側は「キャンセル分を当日に新たに募集すれば、希望者が殺到する恐れがあった」と説明。同県健康増進課も「厚労省が十ミリ瓶にした結果、キャンセル分を有効活用するのは難しい」と訴える。

一方、医療ジャーナリストで医学博士の森田豊さんは「ワクチンを捨てるのは、もったいない。まだ接種していない医療関係者に接種する方法も、あったはずだ」と指摘する。愛知県では、十ミリ瓶が使いにくいために

愛知、注文手控え 卸業者でだぶつき

各診療所が注文を手控え、ワクチンが卸業者の所でだぶつきしてしまう状況が生まれているという。同県新型インフルエンザ対策室では「二人でも多くの人に接種したいが、診療所でワクチンが余れば、そこが代金を負担しなければならぬ。一日間に大人数を集めるのも大変で、無理は言えない」と話す。岐阜県や滋賀県の担当課も「十ミリ瓶を開封して余った分を、他の医療機関に回すのは難しいだろう」と明かした。

厚労省は、十ミリ瓶に対する批判が多いことから、来年一月の配布分からはすべて一ミリ瓶に変更する予定。同省結核感染症課では「ワクチンを廃棄したとしても、多忙な中でやりくりされての話。悪意があったわけではなく、やむを得ない。『もったいない』という感覚も分かるが、責めることはできないのでは」と話している。